

『サントスの御作業』におけるモノナリ文のモダリティ性 —近世語資料との比較対照を中心に—

小野舞子*

1. 先行研究と問題の所在

初期キリシタン資料『サントスの御作業』¹の本文中に「～モノナリ」の形式で終止する文が非常に多く見られることは、姉崎(1932)、福島(1983)などによって早くから指摘されてきた。

「モノナリ」という句において、「モノ」に下接する助動詞ナリが断定辞の機能を有していることを前提とするならば、同資料に見られる「モノナリ」で終止する文も、現代語における「モノダ」文的に解釈することが自然であろう。しかし『サントス』におけるモノナリ終止文には、下記用例(1)(2)のように、現代語「モノダ」の意味機能を以て解釈することの難しい例が多い。

(1) オラシヨ*し給へば、たちまちよみがへられたるものなり。

*オラシヨ=祈祷(『サントス』巻1 p.26)

(2) その時人々ここかしこを尋ねたてまつりて、遂に相看つかまつるものなり。

(『サントス』巻1 p.129)

(1)(2)は一見「たちまち蘇ったものだ」や「ついにお目にかかったものだ」などのように訳すことで、話者による過去回想の「モノダ」として捉えられる。しかし、『サントスの御作業』は作中に明確な語り手を持たず、伝記的資料という形式を取るために、上記2例を話者による回想表現と解釈することは不自然である。

むしろ上記の用例では、「祈祷をなさると、たちまち蘇ったのだ」「尋ね申し上げて、ついにお目にかかったのだ」のように、物事の背後にある事情や、前後の情報を関連付けて説明する「ノダ」文的な解釈を付与することで、文意が通るものと考えられる。

こうした「モノナリ」を現代語「モノダ」文的に捉えた際の不自然さについては、姉崎(1932)や福島(1983)も言及している。しかしながら、『サントスの御作業』について、以後近年に至るまで実際の用例中における「モノナリ」の意味機能・はたらきという点から見解を示した研究は少ない。

他方で、福田(1998)は、中世口語「モノジャ」の中に、現代語のノダによって解釈しうるものがあると論じている。福田は虎清本狂言、江戸初期の噺本に見られたノダ的なモノジャ文に加え、『天草版伊曾保物語』などのキリシタン資料に見られるモノジャの例も一部例示している。ただし、福田は「ノダ的」に機能しているのはあくまで口語体「モノジャ」のみとし、ノダ的な文語体「モノナリ」は見られないだろうともしている。加えて、その分類方法には「モノジャ」の「モノ」が実際の事物や人を指している名詞述語文(後述する分類の「代用語」に相当する)が含まれている可能性も考えられ、些かの疑問が残る²。

とはいえ、福田の指摘に鑑みると、『サントス』に見られる「モノナリ」の一部に、現代語ノダに近いモダリティ性を見出す余地は十分に残されていると言えるだろう。

本稿では用例調査を通じて『サントス』に見ら

*お茶の水女子大学院生

れるモノナリ文の様相を取り上げながら、『サントス』と概ね同時代である近世前期に成立した国内資料、および『サントス』よりも後の時代である近世後期に成立した国内資料とも比較を行う。その上で、『サントスの御作業』におけるモノナリ文のモダリティ性がどのように表れているのか、また「モノナリ」自体のモダリティ性が、時代を経るにつれてどのように変容の兆しを見せたのかという点について、それぞれ検討することを目的に設定する。

2. 資料と方法

2.1 調査方法

用例調査では、『サントス』及びその比較対象となる資料群に見られる「モノナリ」（口語体「モノチャ」）で終止する文、或いは「～モノナリと宣ふ」など、引用箇所として終止する文を検出し、その上で、それらのモノナリ・モノチャ文を(A)「モノダ」文的用法、(B)「ノダ」文的用法に分類した。なお、(A)「モノダ」文的用法に関しては、北村（2001）の分類をもとに、さらに以下6種類に細分化した上で分類を行った。

(A) 「モノダ」文的用法

- (イ) 代用語：これはシリコンチップというモノダ。
- (ロ) 傾向：ルールを厳しく定められると、かえって破りたくなるモノダ。
- (ハ) 回想：昔はよくあの公園で遊んだモノダ。
- (ニ) 当為：遅刻する場合は、必ず連絡するモノダ。
- (ホ) 詠嘆：三日連続で遅刻とは、呆れたモノダ。
- (ヘ) 希望：ぜひお目にかかりたいモノダ。

(B) 「ノダ」文的用法

- (ト) ノダ文的用法
雨が降ったから、傘をさしたノダ。
期限を守らねば、受理されないノダ。

この上で特に「ノダ文的用法」とした『サントス』のモノナリ文については、「～によって」「ほ

どに」等の「説明の接続表現」との共起傾向を観察し、そのノダ性について検証した。これは福田（1998）においても中世期の理由接続節である「～によって」「ほどに」とモノジャの持つ「ノダ」的要素の関連性が指摘されており、また、現代語「ノダ」に関する田野村（1990）他の先行研究においても、ノダ文には「ものごとの原因・理由を新たな情報として説明する」という働きが根幹にあると示されているためである。

本稿においては、『サントス』及びその周辺に位置するキリシタン資料に加えて、同時代・後年代に位置する近世期資料の非キリシタン資料、すなわちキリシタン要素の関わらない資料に関しても同様の調査を実施し、「モノナリ」あるいは「モノジャ」の用いられ方について比較分析を行った。

2.2 対象資料

本稿において調査の対象とした資料は、キリシタン資料、近世語資料それぞれ以下の通りである。使用したテキストについては稿末に記載した。

〈キリシタン資料〉

- (a) 『サントスの御作業』（1591年）文語体
- (b) 『コンテムツス・ムンヂ』（1596年）文語体
- (c) 『天草版伊曾保物語』（1593年）口語体
- (d) 『天草版平家物語』（1592年）
序文：文語体 本文：口語体
- (e) 『懺悔録』（1632年）口語体
〈近世語資料Ⅰ（近世前期）〉
- (f) 『大蔵虎明本狂言集』近世初期 口語体
- (g) 仮名草子作品（6作品、作品名は稿末に記載）
近世初期 文語体
- (h) 浮世草子作品（3作品、作品名は稿末に記載）
近世初中期 文語体
〈近世語資料Ⅱ（近世後期）〉
- (i) 『都鄙問答』（1739年）近世中後期 文語体
- (j) 『鳩翁道話』（1835年）近世後期 口語体

3. 調査結果

以下、調査の結果及び分析を順に示す。

3.1 『サントス』及び周辺キリシタン資料のモノナリ文

前節で示した手法に則って『サントスの御作業』及び周辺のキリシタン資料に見られる「モノナリ」の用例を分類した結果が次頁の【表1】である。ページ数に差があることを考慮した上でも、『サントスの御作業』に記述されるモノナリ終止文は563例と突出して多い。さらにその大部分、約79%にあたる445例が、現代語「モノダ」として解し難い「ノダ文的用法」に分類されるという結果が得られた。例えば以下(3)(4)に挙げるような例である。

- (3) その御死骸をばキリシタンの手に渡さじとて、……チブレといふ大河へ捨てらるるものなり。 (『サントス』巻2 p. 55)
- (4) 悪王嗔恚の深さに、狂人のごとくにして、又別の責め具をととのへさすものなり。 (『サントス』巻2 p. 92)

上記(3)(4)はそれぞれ、(3)「その死骸をキリシタンの手に渡すまいとして、……大河へ捨てなされたのだ」(4)「悪王は怒りの深さに狂人のようになって、別の責め具を準備させたのだ」と解釈される例である。これらはいずれも“～であるから、～ノダ”という形式で、物事の理由やその背後に有る事情を説明しており、「説明のノダ」的に機能していると言える。

また、『サントスの御作業』のノダ文的なモノナリ文は、こうした「説明を果たす」という働きを元に据えた上で、基本的には田野村(1990)の言う「知識表明文」的な態度を取っているものと考えられる。伝記的資料であるということを考えればある種当然とも言えるが、先述の用例(1)～(4)はいずれも、「聞き手(読者)が知らない情報

について、話者(筆者)がそれを知識として提示する」という態度の文である。こうしたノダ文的モノナリ文は、3.3節に後述する狂言資料に見られる「ノダ的なモノジャ」文の有する文態度とは、些か異なったふるまいを見せていると言えよう。

なお、【表1】に示しているように、こうしたノダ文的なモノナリ・モノジャは『サントス』だけに特別限って見られたのではない。例えば下記『天草版平家物語』序文に見られる例のように、同時代期のキリシタン資料にも同様に確認されるものであった。

- (5) 千辞万退すといへども、サンタ・オベチエンシヤの旨に任せ、是非を論ぜず貴命に従ふものなり。

(『天草版平家物語』序 p. 1)

(5)においても、『サントス』の例同様に「サンタ・オベチエンシヤの言うことに任せて、是非を論ずること無く、貴命に従うのだ」、“こうした事情でこうなったノダ”と、できごとの事情を提示しながら説明している文であると言える。

3.2 『サントス』におけるモノナリ文の共起傾向

前項の用例に見られたように、『サントス』に見られるモノナリ文は、「物事の事情を説明する」という「説明のノダ」の形式で表れると考えられた。そのノダ性を実証するために、「理由説明の接続表現」との共起率についても確認した結果が、次頁の【図1】である。

【図1】からは、「ノダ文的」と分類したモノナリ文が「理由説明の接続表現」と共起する割合(グラフ黒色部分)が、その他の用法(「モノダ」的)との共起率に比べ高くなっていることがわかる。勿論、点描部分が示すように『サントス』のモノナリ文にはそもそも接続表現自体が文中に含まれていない例も多く、必ずしも理由説明の接続表現と共起しているわけではない。しかしながら、そ

れでもこうした傾向の差異は、『サントス』に見られる多くのモノナリ文が持つ「ノダ性」を保証する、一定の指針となり得るのではないだろうか。

以上、3.1項に示した用例分布や上記の共起傾向より、『サントスの御作業』に見られるモノナリ文の大半は現代語の「ノダ」に近い働きをしており、特に説明の形式「ノダ」に相当する機能を有しているものと分析される。

3.3 近世前期資料との比較

続いて、『サントス』と概ね同時代に位置づけられる近世初期の国内資料『大蔵虎明本狂言集』、および仮名草子作品、浮世草子作品におけるモノナリ・モノジャ文との比較に移る。『サントス』での用例数に比べると少数ではあるが、次頁【表2】に示した通り、虎明本狂言、仮名草子作品、浮世草子いずれにおいてもノダ的なモノナリ・モノジャの存在を確認することが出来た。

【表2】の結果からは、『サントス』やその周辺

のキリシタン資料に見られるノダ的な「モノナリ」が、キリシタン資料にのみ限定して表れるものではなく、少なくとも同時代の、キリスト教や宣教師、翻訳といった要素の関わらない資料にも用いられていたという点を示すことができるだろう。

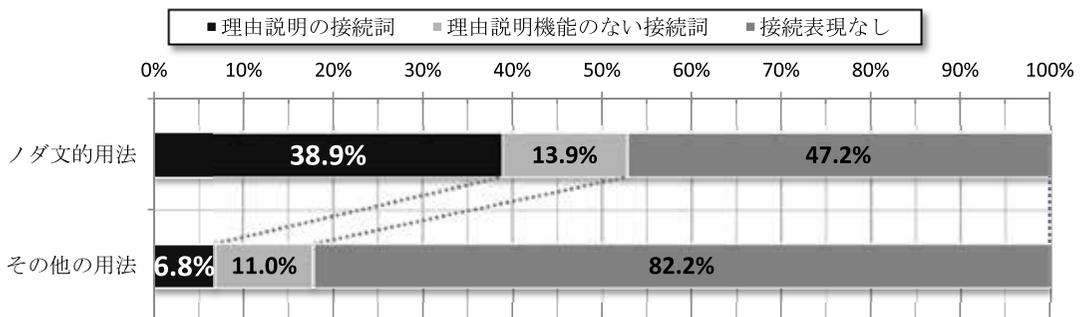
(6) 「あら奇特や、鼻のさきに居るものを、ゑ見ひで、誰もなひと言ふたは不審な、……思ひ出でて候、かくれみのかくれがさをきたによつて、ゑ見なんだものじゃ。

(大蔵虎明本狂言集『節分』)

また、上記(6)は狂言資料に見られるノダ的なモノジャの例であるが、「隠れ蓑と隠れ笠を着ているから、見えないのだ」と、自身の姿が相手に見えていない理由を説明している。これは3.1項で示した『サントス』の知識表明文的なモノナリとは異なり、話者である鬼が、自身の置かれた状況を元に理由を推測し、説明するという「推量判断文」(田野村 1990) 的な文態度を有していると言

【表1】『サントス』及び周辺キリシタン資料に見られるモノナリ・モノジャ終止文の分類³

| 文献名 | 頁数 | 用例総数 | 用法別分類 | | | | | | |
|--------------|------|------|-------|-----|----|----|----|----|----|
| | | | ノダ文的 | 代用語 | 傾向 | 詠嘆 | 当為 | 希望 | 回想 |
| 『サントスの御作業』 | 634p | 563 | 445 | 82 | 30 | 2 | 4 | 0 | 0 |
| 『コンテムツス・ムンヂ』 | 433p | 130 | 36 | 30 | 47 | 2 | 15 | 0 | 0 |
| 『天草版伊曾保物語』 | 39p | 39 | 1 | 7 | 31 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 『天草版平家物語』 | 14p | 14 | 0 | 9 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 『天草版平家物語』序 | 5p | 5 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 『懺悔録』 | 66p | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |



【図1】理由説明の接続表現と共起率

える。『サントス』のモノナリと上記(6)のようなモノジャは、いずれも“説明のノダ”に相当する機能が根幹にある点では共通しているが、このような文態度としてのふるまいにおいては、些かなりとも差異があると分析できる。

3.4 近世後期資料との比較

今回、『サントス』より後の時代に位置する、近世中後期の資料としては『都鄙問答』『鳩翁道話』の2作品を対象とした。いずれも江戸時代の心学者が庶民に向けて物語を交えつつ道徳を説いた心学道話資料であり、聖人伝を通じてキリスト教を説く『サントス』とその資料性に共通するものがあると考えられたためである。

しかしながら、本頁上部の【表3】に示したように、1739年刊行の『都鄙問答』では“説明のノダ”的なモノナリ文を2例確認できたが、約100年後の1835年に刊行された『鳩翁道話』においては、モノジャの用例数自体は『都鄙問答』と同数程度あるにもかかわらず、ノダ文的に用いられていた例は1例も確認できなかった。

これは下記(ii)のように、『鳩翁道話』において

はすでに現代語ノダに相当する新たな説明の形式「ノジャ」が登場・定着しており、そのためにノダ的なモノナリ・モノジャが用いられなくなったものと考えられる。

- (ii) 今あなた方の御心の、店おろしを致してますのじや。若しあなた方が親御へ口ごたへをなされたり、……世間へ難儀を懸け散らすは、皆扇で尻を拭ひ、見臺を枕にしてござるといふものじや。
(『鳩翁道話』 卷壺之上「無理のない心即本心」)

(ii) では説明の形式として「ノジャ」が用いられることにより、ノダ文的な「モノジャ」は現代語モノダに相当する機能を見せるに留まっていた。上記例でも、直後のモノジャは代用語として機能している。

4. まとめ

以上の調査結果及び分析より、『サントスの御作業』及びその同時代もしくは後年代に位置づけ

【表2】『サントスの御作業』と近世前期の国内資料に見られるモノナリ・モノジャの分類

| 文献名(モノナリ/モノジャ) | 用例総数 | 用法別分類 | | | | | | |
|----------------|------|-------|-----|----|----|----|----|----|
| | | ノダ文的 | 代用語 | 傾向 | 詠嘆 | 当為 | 希望 | 回想 |
| 『サントスの御作業』 | 563 | 445 | 82 | 30 | 2 | 4 | 0 | 0 |
| 『大蔵虎明本狂言集』 | 118 | 14 | 69 | 27 | 8 | 0 | 0 | 0 |
| 仮名草子作品(6作品) | 17 | 1 | 8 | 7 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 浮世草子作品(3作品) | 28 | 5 | 7 | 15 | 1 | 0 | 0 | 0 |

【表3】『サントスの御作業』と近世中後期の道話資料におけるモノナリ・モノジャの分類

| 文献名 | 頁数 | 用例総数 | 用法別分類 | | | | | | |
|----------------|------|------|-------|-----|----|----|----|----|----|
| | | | ノダ文的 | 代用語 | 傾向 | 詠嘆 | 当為 | 希望 | 回想 |
| 『サントスの御作業』 | 634p | 563 | 445 | 82 | 30 | 2 | 4 | 0 | 0 |
| 『都鄙問答』 1739年刊行 | 142p | 49 | 2 | 28 | 19 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 『鳩翁道話』 1835年刊行 | 77p | 46 | 0 | 16 | 7 | 20 | 2 | 1 | 0 |

られる資料に見られるモノナリ・モノジャについては、概ね次のようにまとめられた。

第一に、『サントスの御作業』に頻出する「モノナリ」の大半は、説明の形式である現代語「ノダ」に相当する機能を持つと言えた。

第二に、『サントスの御作業』において“説明のノダ”として機能する「モノナリ」は知識表明的な文態度を取る例が大半であるが、一方で狂言資料に見られる“説明のノダ”的な「モノジャ」は、推量をもとに理由づけて判断するという文態度を取るものがあり、説明の形式という根幹部分は共通しているものの、そのふるまいには多少のバリエーションが見られる場合もあると言えた。

第三に、近世中期、概ね1700年代半ばまでの各資料には『サントス』同様に“説明のノダ”的なモノナリ・モノジャが確認できたが、1800年代に至ると、ノダ的なモノナリ・モノジャは用いられなくなったと思われる。その理由としては、「ノダ（ノジャ）」形式の定着が挙げられ、「ノダ」が常に用いられるようになったことで、定着以前に説明の形式として存在していた「モノナリ・モノジャ」は用いられなくなったのだと考えられる。

注

- 1 以下、本稿では適宜『サントス』の略称を用いる。
- 2 例えば「さればこそ紛ひもない。あれ（エソポ）が取ってくらうたものじゃ。」『天草版伊曾保物語』等について、名詞述語文の可能性が指摘できる。この場合は「もの」が「あれ」、すなわちエソポを示しているとも解釈できる。
- 3 『懺悔録』には「モノジャ」自体の用例を確認できなかった。

参考文献

- 姉崎正治（1932）『切支丹宗教文學』同文館
 北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店
 北村雅則（2001）「モノダで終わる文——連体修飾部の時間的限定性からの考察」『名古屋大学国語国文学』第88号, pp. 30-42, 名古屋大学
 田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ—「のだ」の意味と用法—』和泉書院

- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能（日本語研究叢書9）』くろしお出版
 福島邦道（1983）『続 キリシタン資料と国語研究』笠間書院
 福田嘉一郎（1998）「説明の文法的形式の歴史について——連体ナリとノダ」『国語国文』第67巻-02号 pp. 36-52, 京都大学
 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
 山口佳也（1975）「「のだ」の文について」『国文学研究』第56号, pp.12-24, 早稲田大学

調査対象としたテキスト

・キリシタン資料

- Cieslik Hubert, 福島邦道解説（1976）『サントスの御作業 原文編』勉誠社
 福島邦道（1979）『サントスの御作業 翻字研究編』勉誠社
 松岡洸司、三橋健編（1979）『コンテムツス・ムンヂ』勉誠社
 尾原悟編（2002）『コンテムツスムンヂ』教文館
 江口正弘編（2011）『天草版伊曾保物語 影印及び全注釈/言葉の和らげ影印及び翻刻翻訳』新典社
 江口正弘編（2010）『天草版平家物語 影印編』新典社
 江口正弘注釈（2009）『天草版平家物語全注釈』新典社
 Collado Diego, d原著、大塚光信翻字（1957）『懺悔録』風間書房

・近世期資料

- 『大蔵虎明本狂言集』国立国語研究所コーパス開発センター（市村太郎・渡辺由貴ほか）編（2015）『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ 狂言』（短単位データ 0.9, 中納言バージョン 1.5）<https://maro.ninjal.ac.jp>（2015年10月15日～20日、2016年10月10日～13日確認）
 大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』清文堂出版
 前田金五郎、森田武校注（1965）『日本古典文学大系 90 假名草子集』岩波書店 ※調査対象作品：「犬枕」、「恨の介」、「竹齋」、「仁勢物語」、「夫婦宗論物語」、「浮世物語」
 野間光辰校注（1966）『日本古典文学大系91 浮世草子集』岩波書店 ※調査対象作品：夜食時分「好色萬金丹」江島其積「色道大全傾城禁氣」西沢一風「新色五巻書」
 塚本哲三校訂（1945）『心學道話集』有朋堂
 ※調査対象作品：『都鄙問答』『鳩翁道話』